

春望（杜甫）

国破れて山河在り

城春にして草木深し

時に感じては花にも涙を濺ぎ

別れを恨んでは鳥にも心を驚かす

烽火三月に連なり

家書万金に抵る

白頭搔けば更に短く

渾べて簪に勝えざらんと欲す

國破山河在 城春草木深
感時花濺淚 恨別鳥驚心
烽火連三月 家書抵萬金
白頭搔更短 渾欲不勝簪

解説 長安の荒廢した様を見てうたったもの。

語釈 ※春望Ⅱ春のながめ。※国破Ⅲ安祿山の反乱軍によって長安が陥落し、宮殿や町などが破壊されたことをいう。※山河在Ⅱ山や河が昔のままに残っている。※城Ⅱ都城。まちのこと。※感時Ⅱ時世を嘆き悲しむ。※花濺淚Ⅱ花を見ても涙をはらはらと流す。※恨別Ⅱ別は家族の別れをいう。※烽火Ⅱ敵襲を知らせるのろし。ここは戦火の意。※三月Ⅱ三か月。長い間の意。※家書Ⅱ家族からの便り。※抵万金Ⅱ沢山の金額に相当するの意で、非常に手に這入りにくいことをいう。※渾Ⅱすっかり。※欲Ⅱくしようとしている。※不勝簪Ⅱ簪はかんざし。国を憂い家を思うその心労のために白髪が短くうすくなったので、簪を髪に挿してももたないものである。それは、この先もはや冠をかぶって役人としてお役に立つ望みもなくなったの意。

通釈 長安は戦乱のために破壊されてしまったが、自然の山や河は昔どおりに残っている。この城内は春になっても、草木が深く生い茂っているのみで、人影すら見えない。自分はこのいたましい時世に感じて、平和な春ならば花を見て楽しいはずなのに、かえって花を見ては涙をはらはらと流し、家族との別れを恨み悲しんで、心を慰むべき鳥の声にも心を驚かしているのである。戦火は三か月もの長い間続き、家族からの手紙もなかなか来ないので、万金にも相当するほど貴重に思われる。自分の白髪頭をかくと、心労のために髪の毛も短くなってしまい、冠をとめるかんざしも挿せないほどになってしまった。